

須磨里海の会の活動16年と令和8年度活動方針

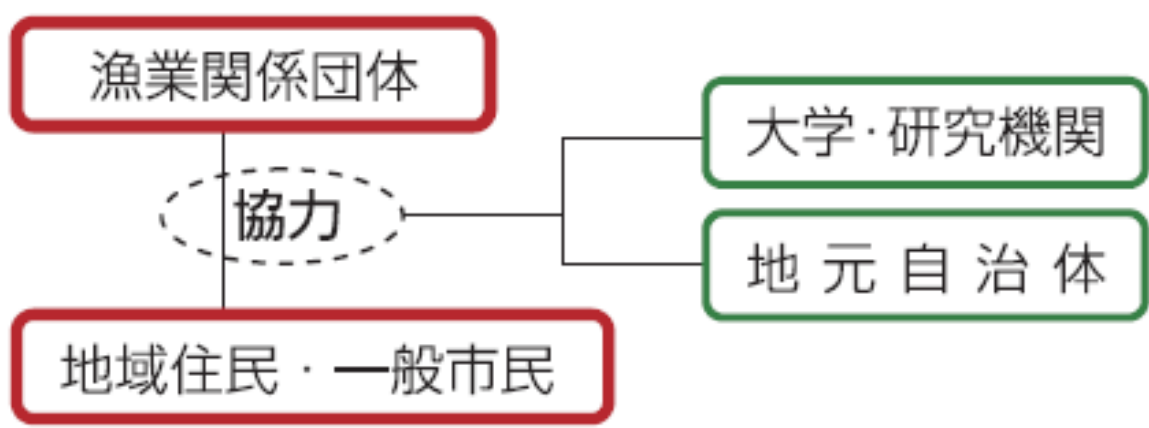
令和8(2026)年10月15日 一般社団法人 須磨里海の会 吉田裕之

本発表の里海活動ならびに調査研究には以下の助成を受けています

- ①大阪湾広域臨海環境整備センター:大阪湾圏域の海域環境再生・創造に関する研究助成(2010～12)
- ②神戸市立須磨海浜水族園の調査・研究・社会教育活動ならびに里海活動助成(2010～2019)
- ③神戸市「食都神戸」実践モデル活動支援(2017)・KOBZゼロカーボン支援補助事業(2022～25)ほか
- ④兵庫県ひょうごの水辺魅力再発見！支援事業等(2017～2023,2025)
- ⑤(公財)兵庫県環境創造協会ひょうご環境保全創造活動助成(2018～2024)
- ⑥Jブルークレジット(2024～2025)、⑦ 東京海上日動アマモ場保全・再生プログラム(2024～2025)
- ⑧住友ゴムCSR基金助成(2025)、⑨須磨浦漁友会ほかの団体(2020～2025)

天然アサリによる潮干狩りをめざして

須磨里海の会 2016年 夏 始動



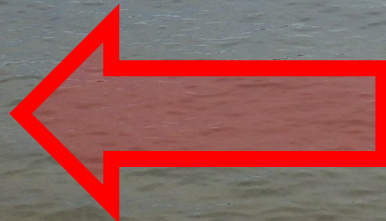
現状把握

原因特定
(推定)

対策実施

二枚貝復活！

潮干狩り・アサリ漁
再開！



環境変化（改変）

【目標】
春になれば天然アサリの恵みで
にぎわう須磨海岸の復活！！

天然アサリによる潮干狩り
をめざして

森川海のつながり
がみられる海岸

六甲の山並み

大阪湾

沖の流れは速く、波も大きい

海水交換の促進

淡水

遠浅

地下水

養浜海岸

流れや波が穏やかな入江のよう
ただし、南に開いた開放的な海岸の
ため波を受け、特に遠浅海岸の砂は
不安定。干潟にはなりにくい

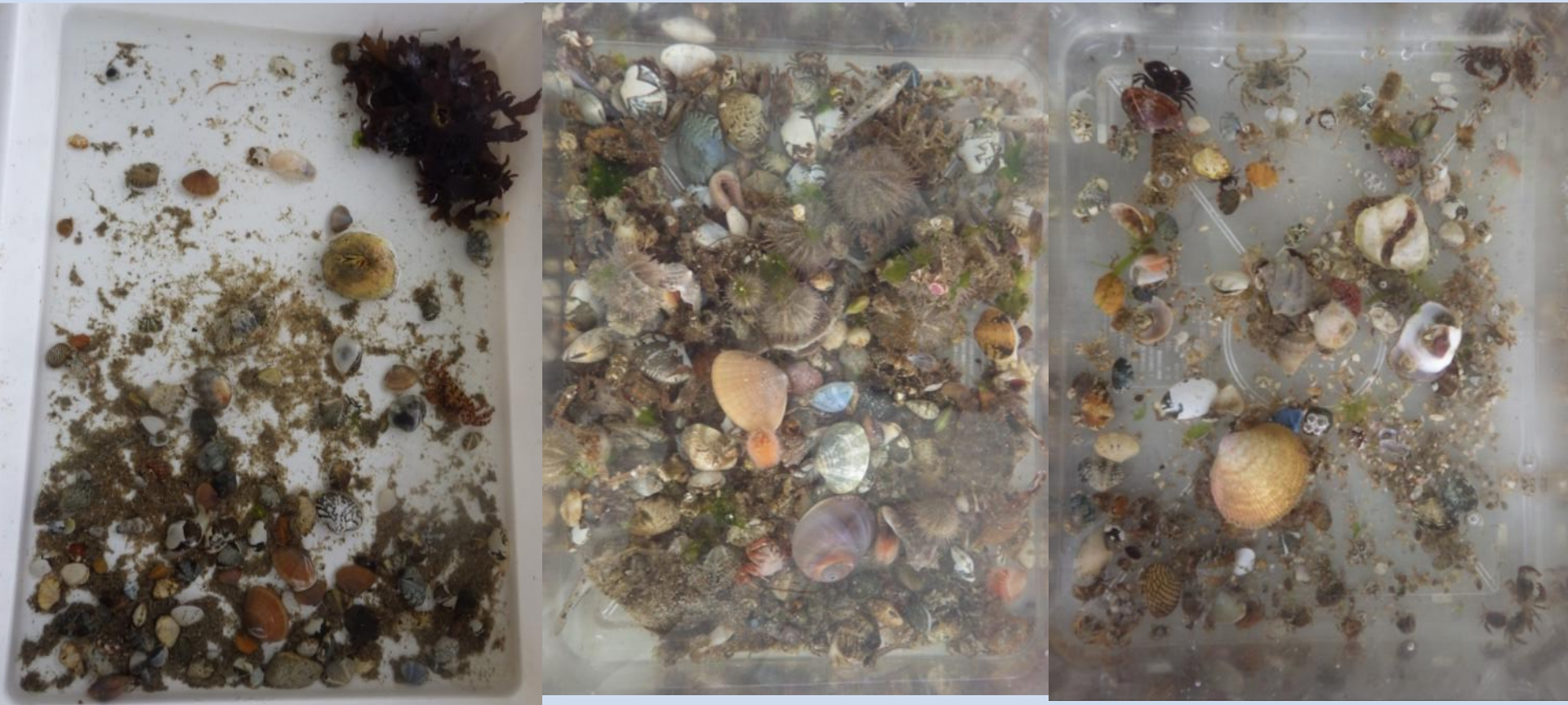
天然アサリによる
潮干狩りをめざして

競合生物対策 ①海底耕耘によるマットの崩壊



天然アサリによる潮干狩りをめざして

◆地曳耕耘でホトトギスガイのマットへの理解が変わる



- 左から遠浅海岸、産卵母貝育成場マットあり、同マットなし
- いずれもアサリはおり、最大殻長30.2、33.7、24.7mm
 - ホトトギスガイのマットがある場所の動物が最も多い

目標：春になれば天然アサリの恵みでにぎわう須磨海岸

実験結果

- ①この海には海底を網で覆うことでアサリが殻長50mmに育つポテンシャルがある。
- ②砂浜を網で覆わなければ殻長30mmに育つのは稀
- ③ホトトギスガイのマット状群体には成長に違いがある。
堅い状態で広がらなければ、むしろアサリの成長を促す。

限界

再生には、市民活動では改善できない「アサリに適した生息基盤の整備」や「栄養環境の改善」が必要

修正

- (1) 産卵母貝の育成（繁殖量の確保）と稚貝の着底場の確保
- (2) 再生計画の見直しと市民への啓発活動を継続

目標：人手が加わることで、須磨海岸の海の生物生産性と生物多様性を高めること

実験結果

- ①アマモは、播種主体で、1-2年は順調に育成繁殖。その後、ホトトギスガイとの競合や食害を受けるも、自生地拡大を確認
- ②アカモクは、生育量の年変化が大。成熟個体を移植継続
- ③カジメは、ワカメとの競合と食害で若齢化。早熟性と2年生を確認。陸上水槽で2年生育させ、かごを用い野外試験。

効果

- ・藻場づくりには、生物培養効果+ブルーカーボン増大効果
- ・Jブルークレジットの資金を、藻場づくりと環境啓発に活用

目標

- (1) 藻場づくりの実績は〈小〉も、市民への啓発効果は〈大〉
- (2) MOBAやポテンシャルの高い地方の藻場再生に活用

神戸の須磨海岸を

団体名：すまうら水産有限責任事業組合、一般社団法人須磨里海の会、兵庫県、神戸市

里海に

スマ Suma 豊かな海プロジェクト 2023~

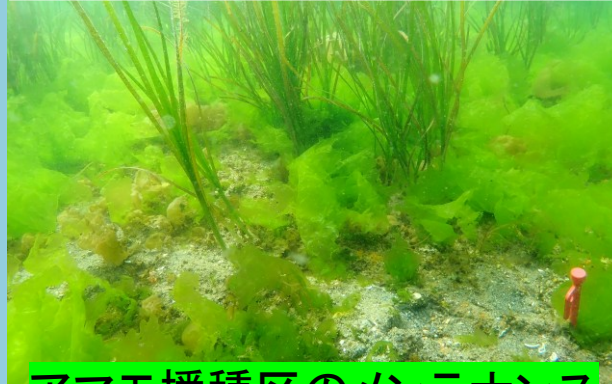
令和7(2025)年度Jブルークレジット認証5.6t-C02

ノリ養殖



ノリ漁場と刈り取り風景

藻場づくり・保全活動



アマモ播種区のメンテナンス

教育・啓発活動



海の中をのぞく教室

漁業とリクリエーションでにぎわう須磨海岸で、環境を穏やかにし、生きものが集う藻場をつくり、海から多くの恵みを受ける豊かな里海をめざします

(1) 組織構成と役割

ブルーカーボンの増大のために 2023年に組成

漁場整備（投石礁など）・増養殖技術
の応用・ブルーカーボン量算出研究



海岸整備・海岸の維持管理・ブルー
フラッグ・自然環境の保全・観光振興

漁業（ノリ・ワカメ養殖・刺網など）
・海岸美化活動・海岸活性化策



自分で株付けしたワカメの収穫イベント



海の環境保全（砂浜生物の再生・
藻場づくりなど）・教育啓発活動

浅場整備

兵庫県

神戸市

官民
連携

すまうら水産

須磨里海の会

養殖・植栽

(2) 令和7(2025)年度 ブルーカーボン関連活動

- ①藻場、基盤及び維持管理手法に係る情報収集とそのGIS整備を進める
- ②藻場分布状況と現存量調査(アマモ・アオサ類・カジメ・ワカメ・アカモク)
- ③移植：播種(アマモ)と母藻移植(アカモク)
- ④移植地のモニタリング調査(アマモ)
- ⑤藻場管理活動(アマモ場、カジメ場、アカモク群落)
- ⑥啓発イベントの実施
- ⑦Jブルークレジットの発行関連

神戸の須磨海岸を

里海に

団体名：すまうら水産有限責任事業組合、一般社団法人須磨里海の会、兵庫県、神戸市

スマ
Suma豊かな海プロジェクト 2023~



里海活動の目標

須磨海岸とその周辺の海を豊かにする

生態系や生物種の再生と保全への取り組みを通じて、

人々の海への関心を高め、人々を海に誘い、

漁業が盛んな恵み豊かな里海を

次代に継承すること

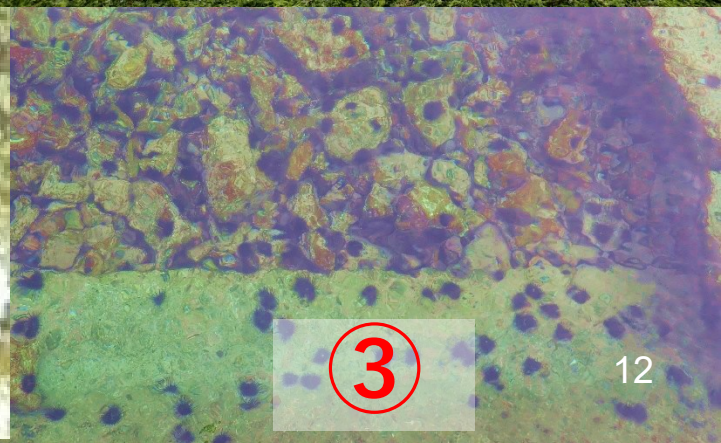
異常繁殖が生態系の異変をおしえる

- ① ホトギスガイ(寿命1年)のマット状の群体:砂地を岩盤に変える。一方で埋在性で寿命の長いアサリは大きく減少。
- ② アオサ類(アナアオサとミナミアオサ)の大繁茂と大量漂着
- ③ ムラサキウニの大発生と磯焼け

①



②



③

市民レベルの里 海活動の意義

④神戸沖で底曳網による大規模なヒトデの駆除
(写真は東須磨漁港に集められたヒトデのほんの一部)

⑤クロダイは大漁の一方で、シャコは小さくて少ない。

2013年05月18日



シャコ



マヒトデ



クロダイ

⑥ナルトビエイは本来暖海性のエイで、瀬戸内海には20年前から現れた。貝類を好み、特に岩礁や砂地で多産する二枚貝を多食する大食漢



直立岸壁で、貝をけずって食べるナルトビエイ

これらとの関係が疑われるのが、**水温の上昇と貧栄養化**
海の温度があがって増えているは、ナルトビエイ、アイゴ、ミナミアオサなど。

・ナルトビエイは二枚貝が減った要因の一つ。かつて岸壁を席捲したムラサキイガイも、岸壁で夏にみられることはない。

・アイゴは須磨海岸付近で生まれ、浅い海で大量に育つ。その滞在期間は初夏から初冬までと長い。アイゴはアオサ類を好む。近年増えたアオサ類を食べて育つアイゴの稚魚や未成魚の群れが確認されている。アオサ類が少なくなる8月以降は、カジメやアマモの葉から茎まで食べつくすと考えられる。

生物の異常繁殖は、生態系のバランスが崩れている兆しか？
改善する現実的な対策を実行できるのか？
里海活動に成果が得られるか？

市民レベル
の里海活動
の意義

自然共生
サイト

面積：東西約 2 km の砂浜の地先 60ha
生態系タイプ：藻場・岩礁・砂浜



大阪湾

潮流

千歳川

養浜海岸

地下水



市民レベルの里海活動の意義

◇環境省では、「民間の取組等によって生物多様性の保全が図られている区域」として、須磨海岸60haを「自然共生サイト」に認定
(申請者：須磨海岸「Suma豊かな海プロジェクト」)

- (1)在来種を中心に多様な動植物種(約400種)からなる健全な生態系が存在する場であること。
- (2)多数の越冬・休息・繁殖・採餌・移動など、動物の生活史に重要な場などと評価されたことなど

2025年9月30日、「地域における生物の多様性の増進のための活動の促進等に関する法律」に基づく第1回自然共生サイト認定式に参加

今後、自然共生サイトがネイチャーポジティブ推進の地域のハブになることが期待されている。



日頃は比較的静かな海でも、
時には自然の猛威を受けます。例) 台風の通過に伴う大時化



市民レベルの里海活動の意義 洪水の後に大しけになると、 大量のごみが海岸に打ちあがる



リクリエーション、スポーツ、食、教育・・・・・
みんなで砂浜で楽しもう

海の生き物を
保全する活動
(一般社団法人
須磨里海の会)

漁業
(すまうら水産
有限責任事業組合)

海岸を美しく
する活動
(特定非営利活動
法人神戸海さくら)

市民レベルの里海活動の意義

里海教室

1年間毎月開催

概要

期日

初夏

春

冬

夏

秋

第1回	「海岸の生きものさかし」:大阪湾一斉調査の須磨海岸地点の調査に合流し、海岸動植物の多様性を学ぶ	5月25日
第2回	「打ち寄せる岸辺の波に潜む動物」:波打ち際で碎波帯ネットを、沖で丸特ネットを曳き、岸辺を利用する生き物を調べる。	6月21日
第3回	「海の豊かさの基盤、プランクトン」:動植物プランクトンの採集と検鏡による学習により、生態系について考える。	7月12日
	シュノーケリング教室①	7月12日
第4回	「夜の海」:夜の海岸に出て、光に集まる動物を調べるとともに、夜光虫やウミホタルといった光る動物の生態を学び、海的神秘を体験する。	8月9日
	シュノーケリング教室②	8月11日
	シュノーケリング教室③	9月6日
第5回	「漂流し生きるプランクトンの正体」:本来のチリメンジャコを観察し、不思議な海生生物の生態を学ぶ	9月13日
第6回	「海のゆりかご、藻場の生きもの」:小さな地曳網を用いて、アマモ場や砂地にすむ魚やイカなどの遊泳動物や海の底にすむベントスを採集し、浅い場所の大切さを学ぶ。	10月12日
第7回	「アマモの森をつくろう」:砂地に藻場すなわち海の森をつくるアマモの生態と人のかかわりを学び、アマモ場が少なくなった海で、移植によるアマモを増やす活動を体験する。	11月9日
第8回	「大きな海藻ワカメを育てる海」:須磨浦水産研究会が行うワカメの株付けに参加する。ワカメをはじめとする海藻の押し葉標本をつくり、形態から学び、海藻という植物と人のかかわりを学ぶ。	12月7日
第9回	「小さな海藻ノリを育てる海」:すまうら水産有限責任事業組合が行うノリ養殖について、ノリの生産工場を見学し、漁業者の話を聞くことによって豊かな海を考える。	1月17日
第10回	「大きな海藻ワカメを育てる海」:須磨浦水産研究会が行うワカメの収穫イベントに参加し、海の偉大な恵みを味わう。	2月8日
第11回	「冷たい海に生きる命」:水温が10度を下回る瀬戸内海、地曳耕転で採集された砂地の生きものを観察し、海藻標本を作成し思い出として持ち帰る。	3月1日
オプション	オプションイベントとして、台風で猛烈な時化の後に須磨海岸を歩き、漂着物を調査し、海のつながりを学ぶ。	夏から秋

主催：一般社団法人 須磨里海の会 後援：須磨区役所



小学4～6年生対象

「自然の作用を理解し、生態系を生かす」
 このことを里海は未来を生きる子供たちに伝えるために、
 2022年から、里海教室をはじめています

目標：須磨海岸とその周辺の海を豊かにする生態系や生物種の再生と保全への取り組みを通じて、（中略）、漁業が盛んな恵み豊かな里海を次代に継承すること

方法

- ① 里海活動では、これらの生態系の構成種の状況を確認
- ② 順応的な管理と啓発活動により、見守りと再生活動を継続

組織

- ・生態系の確認は、「須磨海岸Suma豊かな海プロジェクト」
- ・順応的な管理（藻場づくり）は、「神戸の須磨海岸を里海にSuma豊かな海プロジェクト」
- ・啓発活動は、「Suma豊かな海プロジェクト」と里海教室

結論

私たちの里海活動は、未来を生きる人々のためにある

今後の里海づくりの在り方に関する提言 (2025年3月)

今後の里海の在り方検討会

ここで、環境省が目指すべき「里海づくり」の理念と指針を提示された。

提言1: 良好な海域環境の保全・再生・創出

課題) 自然の回復力を活用し自然変動の後も自律的に回復存続する里海
複雑で絶えず変化する生態系の微妙な均衡を維持

対策) 周辺部も含めたモニタリングにより取り組みを評価

提言2: 里海における地域資源の利活用と好循環の形成

課題) 持続可能性

対策) 暮らし、観光リクリエーション、農林漁業、教育の利活用

利活用による里海的环境や生態系のモニタリングと順応的な管理

提言3: 地域の歴史、伝統、文化等や自主性を重んじた多様な主体の参画と連携

課題) 人材、資金、情報の不足⇒担い手不在

対策) ネイチャーポジティブに取り組む企業、自治体等沿岸管理者、研究機関が、里海活動団体と連携して成果の効率化を図る

- ・提言1～2には、当団体の設立当初からの方針ですでに取り組んでいる。
- ・最も重要なのは提言3。

海の生きものや生物が絡む活動は取り組みにくく、里海の輪を広げるには、担い手をつくり育てるという社会の理解と支援が必要である。

**特に、沿岸の企業、自治体、研究機関、
漁業者、水族館・博物館などの施設の方々に期待する**